とあるIS使い

野鳥獣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とあるＩＳ使い

【Ｎコード】
Ｎ９６２２Ｙ

【作者名】
野鳥獣

【あらすじ】
学園都市の中で第６位に位置する発火能力者が授業の一環で学園外の施設警備をするため展示会場の視察に来ていたが、搬入されてきたＩＳに触れてしまい提供していたＩＳ学園の教師人の前で機動させてしまった。
学園都市から離れ、ＩＳ学園に転入することになってしまった少年の物語。

紹介（前書き）

作者は、Wガンダム好きです。
主人公がたまに壊れます。

紹介

学園都市では、能力５の発火能力者の力を持つ少年は、学園外で行われる展示会に警備員として行ったが搬送されているＩＳに触れてしまいあろう事か起動させてしまう。ＩＳを扱う二人目の男として。
学園都市から専用機を託されＩＳ学園に舞い降りる。

その少年の名前は、白井（シロイ）紅兎（セキト）
年齢：１６歳
容姿：茶髪の赤目　イメージ（輝きのタクトに出てくるシンドウ・スガタ）
専用機：暁（あかつき）
一次移行：真紅で背中に２翼ある。（ＷＧ）
二次移行：黄金で縁が真紅。背中に４翼あるがＡＢです。（ＷＧ０カスタム）
武器：ランスとバスターライフル・・・追々追加します。

ＡＢＷ：アンチ・ビームの略です。要するにビーム兵器が効かない反則機です。
一次と二次移行の同一点は、紅兎の能力使用可能な点くらいです。

プロローグ（前書き）

携帯止められたので、ＰＣで執筆開始。
元紋章学です。

プロローグ

ここは、学園都市　東京都西部を切り拓いて作られたこの都市では、”超能力開発”が学校のカリキュラムに組み込まれており２３０万の人口の実に八割を占める学生達が日々『頭の開発』に取り組んでいるのだが・・・

「お兄様ー何処ですのー！！」

中学生でこの学園都市内の風紀委員（ジャッジメント）に勤務する俺の妹　白井黒子が”お兄様”と呼んでいる少年の物語なのだが・・・少年は、すでに家を出ており妹の声がむなしく響くだけだった。

第１７７支部隊

「紅兎君黒子ちゃん待たなくて良かったの？」

この支部に部長をする女性に呼ばれえ書類から頭を上げ話出した少年がこの物語の主人公”白井紅兎”茶髪の赤目

「良いも何も、明日から学園外で行われる展示会の資料製作を夜明けとともに開始すると昨日連絡したにもかかわらず忘れている黒が悪い。」

紅兎が言う様に連絡したのにいつもと同じ０７００に起きて俺が住んでいる寮に行き探しまわったという黒妹が悪いのだ。しかも俺に対する過剰までのブラコン・・・

「お兄様ー黒子は、黒子は、お兄様の温もりが！」

といつもの台詞と共に後ろに瞬間移動をしてまで、背中に抱きついてくる。

「黒、仕事中だ離れなさい。」

「嫌ですわ！」

「はあー、この書類が出来上がり次第、現地に行って警備配置の確認が有るんだよ」

兄と妹のやり取りは、恒例行事なので周りわ微笑ましく見ている。出来れば止めて欲しい。そこにようやく救いが現れた。

「黒子、紅兎さんの仕事また邪魔してるの？」

ここの支部と関係ないが、この学園として超能力者第3位に位置する超電磁砲こと”御坂美琴”である。美琴が来るとこの妹は、ターゲットを変更して彼女にダイブ！！

バチバチ！

と黒子が電撃をうけ崩れ落ちる。

「助かったぞ美琴。流石第3位だな。」

痺れている黒子を無視して俺のほうに来て・・・

「何言ってるんですか、第6位の発火能力有るじゃないですか？」

そう白井紅兎は、発火能力で第6位に位置する超能力者だ。

「美琴・・・流石に実の妹を焼きたくは、ないぞ。それに支部が消し炭になる。」

紅兎の意味を体で経験済みの人たちは、顔面蒼白になる。一度紅兎をほんきで怒らし支部にあるすべての金属を融解させ消し炭になりかかった事を思い出したようだった。

「よし、書類製作終了っと」

タン！

最後のＥｎｔｅｒを打ち終え上着を羽織ると

「じゃ、学園外の展示施設に行ってきます。美琴、黒に襲われない様にな（笑）」

支部を出ると同時に黒子が復活したらしく美琴の悲鳴が聞こえた。

プロローグ（後書き）

とあるキャラは、プロローグのみの参加となります。他わたぶん夏休みか冬休みあたりかな？基本軸は、ＩＳに置きたいと思っています。

プロローグＩＳ機動（前書き）

かなり短いです。

プロローグIS機動

書類を終え、会場施設にいき指示を出す中一人の女性が近付いてきたその女性は、黒髪に凜とした黒いスーツが似合うひとだった。

「君が学園都市から来た者か？」

「はい、学園都市第177支部より派遣されて来ました白井紅兎です。」

「そか、若いのに良い指揮をしているから気になってな。」

「いえまだまだです。人の死角を潰すだけでも苦労しています。」

死角を潰すのに苦労していると聞いた女性は、興味を持ったのか聞いてきた。

「ほーたとえば？」

「例えば、このホール入り口ですが一見見晴らしが良いですが、会場に押し寄せるお客を想定すると、入り口手前の両角かとISを展示するここの・・・」

ISを展示してある場所のそばで、触れるというジェスチャーをしようとしてISに触れてしまいそれは、起こった・・・

[搭乗者確認・・皮膜装甲展開・・推進機正常作動・・近接ブレー

ド展開」

男である俺がＩＳを起動させてしまった。もちろん近くにいた女性が驚愕していたのは、言うまでもない。

「まさか一夏だけでなく他にもＩＳを動かせる奴が居るとわな・・・」

女性がどこかに電話した後向き直り・・・

「よく聞け、白井紅兎・・明日より学園都市からＩＳ学園に転入とする。」

「え・・・ええええええええ！！」

「それから私は、ＩＳ学園で教師をしている。織斑千冬だ。学校では、織斑先生と呼ぶように！」

ゆうむを言わさず紅兎は、ＩＳ学園に行くことになった。会場から学園都市に帰るとすで通知書が支部に回され学園にも回っていた。諦め、寮に戻ると既に荷物が全てＩＳ学園に送られておりものけの空になっていた。

「会場からたった一時間でこれかよ・・・黒絶対煩いだろうな・・・気が重くなる。」

案の定黒子わ既に知っており『これからお兄様の温もりが』と黒いオーラが噴出していた。
すまん美琴犠牲になってくれ。ＩＳ学園に向かうことになった。

プロローグＩＳ機動（後書き）

本当にみじかくて済みません。次回から本編に入りたいと思います。

二人目の男の子！！（前書き）

本編書いていきたいと思います。

二人目の男の子！！

学園都市から全ての荷物が運びだされていた事に驚きと諦め付きIS学園に向かった。

IS運用協定：ISの操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達は、原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは、協定参加国の共有財産として公開義務があり、また黙秘・隠匿をおこなう権利わ日本国に無い。また当機関内におけるいかなる問題にも日本国は、公平に介入し、協定参加国が理解できる解決をすることを義務づける。――――――IS操縦者育成機関についてより抜粋

「要するに、別国家から良いように扱われてる分けか・・・情け無いな。」

今まで住んでいた部屋に有ったIS教本を読みながら学園行きのモノレールに乗り読んでいると、アナウンスが流れた。

「ご乗車有り難うございました・・・まもなく終点IS学園前・・・お荷物等お忘れにご注意下さい。」

紅兎は、教本から顔を上げると辺りを海に囲まれた学園・・・学園施設でできた島が目に入ってきた。

「IS学園ね～・・・どうなるかな。」

学園校門前にいくと警備の時にいた女性”織斑千冬”がまっていた。

「織斑さん、勝手に荷物手配しないでくださいい荷物が無くてあせったんですから！！」
「それわすまなかった。白井紅兎歓迎してやる。ついて来い。」
織斑さんは、謝罪であたまを下げた後着いて来るように言った。
受付で書類にサインし職員室に向かった。
「ここでは、先生と呼ぶようにしろ。」
「はい、織斑先生。」
職員室に入ると他の女性職員の目が獲物を見るようでかなり怖かったことを記しておく。
「よし白井、これがお前の制服になる。あとこれも。」
織斑先生から制服を二着と・・・
「鍵？」
「そうだしばらく使う寮の部屋の鍵だ。その部屋は、もう一人の住人も居るから仲良くしろよ。制服に着替えたら教室に行くぞ。」
職員室備え付？けの更衣室で白を基調とした制服に袖を通した。
「なぜ、サイズがピッタリなんだ？」
「白井着替え終わったか？」

なぜか合う制服に疑問をもったが更衣室の外から織斑先生の声がしたため考えを中断し更衣室を後にした脱いだ服は、教室に行く前に部屋の鞄にいれた。

「よし、名前を呼んだら入って来い。」

織斑先生が先に教室に入り・・・

「山田君授業中済まない。・・・・今日から学園都市から転入することになった奴が居るが決して騒ぐなよ・・・白井入って来い。」

織斑先生に呼ばれ教室に入り、教団に立っている織斑先生の隣に立って自己紹介になった。

「ただいま紹介が有りました学園都市から此方ＩＳ学園に転入することになった、白井紅兎です。新たな環境で不慣れなことも有りますが宜しくお願いします。」

紅兎の自己紹介が終わると教室が静まりかえり・・・耳をふさいだ男子生徒が一人居た。

「お・・・」

「お？」

「男〜！！！！！！！！！！」

先ほど耳を塞いでいた男子が耐え切れなかったのか顔を青くして唸っている中女子の戯言が聞こえた。

「織斑君に続いて二人目の男子よ！」
「茶髪で宝石のようなあの目綺麗～」
「静かにせんか馬鹿者質問は、休憩時間にしろ。席は、布仏の隣だ。」
席を探していると身長に合わないダボダボな制服を着た女子生徒が手を挙げ『こっちだよ』と言ってくれた。
「布仏済まないが、白井に教科書を見せてやれ。放課後に職員室に来い教科書を用意しておく。いいな？」
「はい。布仏さんよろしく。」
「よろしく、しい～君」
席に着いたことを確認すると
「では、授業の続きをする。」
後々わかった事だが顔を青くし潰れているのは、織斑一夏・・織斑千冬さんの弟で織斑先生曰くフラグ一級建築の愚弟らしい。
「フラグってなに？」

二人目の男の子！！（後書き）

取り合えずこんな感じです。次は、相部屋の相手がでます。誰が良いかな？

同居人（前書き）

変わるかも知れない同居人

同居人

ＩＳ学園に転入し昼休み・・・

「男が俺だけって心細かったんだ感謝するぜ。」

四現目が終わり、昼休みになり女子の声の犠牲者が声を掛けてきた。

「織斑先生の弟だよな？」

「織斑一夏だ。一夏と呼んでくれ。」

「なら、紅兎と呼んでくれれば良い。」

「紅兎な。宜しくところで一緒に飯に行かないか？」

「構わないけど、こちを見ているあの子は？」

紅兎達を睨み付けるいや羨ましそうに見る黒い長髪の毛でリボンで結ってる子の視線を感じ一夏に聞いてみた。

「食堂で紹介するよ。時間無くなるぜ。」

「ああ・・・」

一夏は、先ほどの視線の子を連れ食堂に来て、自分の昼食を持って空いている席に座った。

「じゃあ改めて自己紹介な、箒。」

長い髪の女の子の名前？を言うと・・

「篠ノ之箒だよろしく白井。」

「ああよろしく篠ノ之。」

女子生徒の名前は、篠ノ之箒と言うらしい。

「で、箒頼みがある。ＩＳについて教えてくれ！」

なんでも紅兎が来る前の日、イギリス代表候補生に祖国を侮辱され切れて喧嘩を買ったらしい。しかも一夏は、ＩＳについてド素人の状態で一週間後に戦うらしい。

「俺が思うに・・・一夏お前馬鹿だろ？」

「ぐっつ・・・」

「白井の言う通りだ。簡単な挑発に乗りおって。」

二人から罵倒され潰れる一夏に・・

「篠ノ之、何か習い事していないか武術とか？」

「なぜその様な事を？」

「ここに来るまでの間に教本を読んだんだけど、ＩＳは、搭乗者の動きをトレースして動かすと書いてあったから短い期間でも鍛える

事が可能かなと・・・な。」

紅兎の言葉に起き上がる一夏。

「そうだ剣道全国大会優勝者に習えば・・頼む箒！！」

一夏の頼みに唸る篠ノ之そこに紅兎が小声で・・・

「篠ノ之、ここで一夏に教えれば二人っきりになれるぞ。」

紅兎に鋭い視線を送る

「なぜ私が！」

「気づかないと思ったか、一夏を見るときわずかに照れてるんだよ、お前わ。」

「うぅ・・分かった放課後剣道場に来い。」

「ありがとう箒！あっ白井も来るか？」

篠ノ之のために

「悪い、用事だ。どちらにしろ織斑先生にも呼ばれているからパスだ。」

「そうか・・・」

「ご馳走様。先行くぞ。」

話しながら食べていた為、二人より先に食い終わった。去り際に『がんばれよ篠ノ之。』と言い食堂を後にし教室に戻り、残りの授業も難無く終え、放課後・・・

職員室

「織斑先生、教科書を取りに来ました。」

授業で言われた通り教科書を取りに来た。

「ああこれが教科書だ。ところで、織斑から聞いたか？」

「なにをですか？」

「決闘のことをだ。」

「聞きましたよ。イギリスの代表候補生に祖国を侮辱され切れたらしいですね。」

「お前ならどう見る？」

「簡単な意見なら、経験のある候補生ですね。あと・・・篠ノ之に鍛えてもらって何処まで食いつけるかかな？」

「篠ノ之とか・・・白井は、教えないのか？」

「候補生ならまだしも、素人だと死にますよ。灰も残さず。」

「・・・白井お前は」

「学園都市超能力者第６位？紅蓮の使い手〃（パイロキネシス）ですから。」

「そうかそうだったな。」

紅兎の手に炎が現れ握り潰すと、織斑先生は、意味ありげに苦笑いをした。

「引き止めてすまなかったな。帰って良いぞ。」

「はいそれでわまた明日。」

紅兎が職員室から出た後織斑千冬の背中は、嫌な汗でベタツイテイタ・・・

「とんでもない圧力だったな。久しぶりに冷や汗を掻いたな・・・」

寮にて・・・

「１０２６号室で合ってるよな・・・」

現実から目を背けたい状況になっていた。

「し～君どうしたの～？」

目の前には、狐のきぐるみを着た布仏本音が居た。布仏は、固まった紅兎の握る紙と鍵を見て・・・

「し～君が同居人なんだね～よろしく～♪」

固まりから開放され、改めて・・・諦めた。

「で、何をやっている？」

「し～君の髪の毛サラサラ～♪」

ベットに座っていると、布仏がよじ登り頬ずりしている。

「し～君の髪の毛気持ち良いね♪」

「夕食に行きたいんだけど・・・」

「レッツゴオー！！」

結局食堂まで肩車で行き、開放されたが食べ終わってまたよじ登ってきた。

端から見ると親子らしく上級生から暖かな眼で見られていた。

余談だが、布仏からは、本音と呼ぶように又は、愛称で（苗字呼びが気に入らないらしく。）篠ノ之からは、箒と呼ぶように（友として）言われた。

同居人（後書き）

結局・・布仏本音さんにしました。まあ作者のお気に入りなので（笑）

頭冷やそうか？（前書き）

漫画で一週間の出来事が省略差されているのでオリジナル追加します。タイトルは、後書きで察してください。

頭冷やそうか？

同居人本音と朝食を取り終わり教室での一場面

「ちょっとよろしくて」

自分の席に着き本音と今日の授業について話していると誰かを呼ぶ声がした。

「聞いてますの！」

「本音、誰か呼ばれているのか？」

「名前呼んでいないから違うとおもうよ～。」

名前を呼ばれるまで無視を決め込む・・誰の事か分からないし。

「あなたですわよ！！」

「おはよう紅兎！」

「お早うございます紅兎さん」

キイキイ声を上げて居るのを無視し挨拶を返す。

「おっす一夏お早う箒。」

「おりむ～おはよ～しののんもおはよ～♪」

さっきから声を張り上げている人分かると思うが、イギリス代表候補生セシリア・オルコットだ。
一夏は、席に荷物を置くと紅兎に小声で聞いてきた。
「さっきから紅兎の事呼んでいるんじゃないのか？」
「名前を呼ばれてるわけでもないし、アイツ日本人の事を極東の猿って言ったんだろ？だったら猿語に翻訳してもらわないとな。（黒笑）」
「結構黒いなお前・・・」
一夏にイギリスに喧嘩を売られた内容を昨日聞いていたため上から目線を全て無視するようにしていた。
チャイムが鳴り先生が来ているにもかかわらず金髪は、頭に血が上っているのか気づいていない。
「おい！」
「きいてますの！」
バン！！
「イタ！　なんですｎ」
「チャイムが鳴り終わっているさっさと席に着かんか馬鹿者それとももう一発喰らいたいか？」
「済みません！」

織斑先生の出席簿が金髪に振り下ろされ、言い返そうとしたが流石に先生には、無理だった。

「今日のＳＨＲは、終わりだが・・白井さっきのわなんだ？」

織斑先生に聞かれ立ち上がるとありのままを答える。

「何だといわれても、こっちが聞き返したいですね。別に名指しで話しかけられた訳でも無し、それに昨日何処かの代表候補ともあろうものが日本人に極東の猿といったらしいですね・・」

紅兎は、一度言葉を切り後ろの席に居る女子生徒達に質問を投げかけた。

「でわ、笑っている皆さんに問います。日本人を極東の猿と言いましたが、ＩＳは、何処の国の人間が作り上げましたか？ＩＳが無ければあなた達は、この学園にこれましたか？どうですか？それとも理解できないかな？・・・俺を怒らすなよ死にたいなら別だがな。」

途中から紅兎が手の平を上げると炎が現れた。

「理解できないなら俺が消し炭にしてあげるよ。生きてる価値無いし。少し頭冷やそうか？クッス」

「「「ビック」」」

流石にこれには、恐怖を感じたのか女子生徒の笑いが消え顔面蒼白にし怯えていた。そこに・・・

スッパン！

織斑先生の出席簿が落とされた。

「イタ！」

「冷やすのは、お前だ！馬鹿者、脅してどうする！・・・確かにＩＳが無ければここに居ることも話す事さえ出来なっかだろうな。お前達よく聞け！自国に誇りを持つのは、良い事だがオルコット日本を侮辱する事わ即ち私を侮辱するのと同意だ。私は、日本国民だからな。自分の言葉に責任を持て良いな！」

「「「はい！！」」」

「でわ次の授業の準備をしておけ！以上解散！」

先生が教室を出ると一夏と箒が席に来た。

「凄いです。紅兎さん！」

「あれは、何だどうなっているんだ？」

「自己紹介の時にも言ったろ。俺は、学園都市出身だって。」

「言ってたけど学園都市ってなに？」

「一夏・・・そこから！？」

「学園都市って言うのは、超能力開発が学校のカリキュラムに組み込まれている養成学校で２３０万の人口の八割が学生がで占められている特殊な都市だ。学問関連で考えれば水準だけでいえば、世界

一位だろうな。」

「頭良いのか！」

「そこに食いつくか・・・」

「教本渡されたんだが、電話帳みたいな厚さの教本読んだだろ！俺まだ読みきれてないけど・・・」

「ああアレか、学園に来る前に暇だったから読んだけどもう読み終わったぞ。てか小説みたいなものだろ？解説つきの？」

「・・・・・・・はあ！？よみっきた！！」

「諦めろ一夏。現実とは、このようなものだ。」

一夏のといにカミングアウトした内容にショックした一夏は、箒に慰められた？

だっまて聞いていた本音は、目を爛々と輝かせ一夏は、『仲間が出来たと思ったのに』と死んだ魚の目をして箒に支えられ席に戻った。

「可笑しな事言ったかな俺？」

「し～君は、可笑しな事言ってないよ～♪」

余談　この一軒で国の差別が減った変わりに白井紅兎を怒らすな。一年一組の炎神と言う渾名がつけられ紅兎が言い合いをする現場に近づくと静かになり直ぐ仲直りをするようになっていた。

頭冷やそうか？（後書き）

今回の作品もオリ主を怒らすと某管理局の白い悪魔の如し！
怖い！！『私、悪魔じゃないもん！少し頭を冷やそうか？スターライト・ブレイカー』ギャアアアアアアアアアアアアアアア

クラス代表決定戦！（前書き）

飛んで決戦開始だ！

クラス代表決定戦！

あっという間に月曜日が来てしっまた。いまアリーナの通路に一夏・箒・紅兎が居る。

「なあ・・・箒」

「なんだ一夏」

「気のせいかも知れないんだが」

「そうか気のせいだろ」

「ＩＳの事教えてくれる話は、どうなたんだ？」

「・・・・・・・・・・・・」

「目をそらすな。」

そう紅兎（俺）が見る限りここ六日ばかり剣道の練習しかしていない。ＩＳのあの字も出無いくらい剣道ばかりしていた。箒も理解する様に一夏から顔を背け俺の方を向いてきた。

「一夏、専用ＩＳが来ていなかったんだ。剣道で少しは、体が動くようになったんじゃないのか？」

「そりゃ～そうだけど・・・」

「それに、お前二つの事を同等に理解できるのか？」

「うぐぅ・・・」

紅兎のいう様に二つの事を処理（覚える）のが苦手らしく何もしゃべらなくなった。

落ち込む一夏を無視して箒と話していると・・・

パタパタ

子供が走る様な音が聞こえてきた。

「織斑君おりむらくんオリムラクン」

名前を連呼しながら駆け寄って来る人がいた。

「見覚えあるが・・・誰だっけ？」

「「・・・・」」

紅兎の言葉に『何言ってんだ』見たいな顔をされた。

一夏は、気を取り直して

「どうしたんですか山田先生？」

紅兎は、驚いた『教室のマスコットだと思った』などと口にわださなっかた。

「来ました！織斑君のＩＳと白井君のＩＳ！！ピットに搬入して有ります急いで下さい！」

「一夏のは、分かりますが。なぜ俺まで？」

「それについては、私が説明するがまずは、準備しろ。アリーナを借りられる時間は、そうながくないぞ。」

来ていたのか歩きながら織斑先生が説明している。

「白井のは、学園都市がどっかの馬鹿ウサギに頼んでコアを提供してもらったらしい。ああそれと、織斑の試合が終わったら白井の専用機データーを取るからな。」

ガゴン

ピットに置かれた二つの内ひとつのコンテナの扉が開き片方には『白』がいた。

白。

真っ白。

飾り気の無い、無の色。

眩しい程の純白を纏ったＩＳがその装甲を開放して操縦者を待っていた。

そしてもう一つのコンテナの扉が開くと『紅』がいた。

赤でなく紅。

紅全てを燃やそうとする炎の色

煌々とした真紅を纏ったＩＳが早く暴れたいと待ちわびる様に待っていた。

一夏と紅兎がＩＳに見とれていると山田先生の説明が始まった。

「白色のＩＳが織斑君の『白式（ビャクシキ）』紅色のＩＳが白井君の『暁（アカツキ）』です。」

」

一夏の装着と平行して白井の装着となった。

「背中を預けるように・・・ああ、そうだ。座る感じで良い。あとは、システムが最適化をする。」

二人は、織斑先生の言葉道り、装甲が開いているＩＳに体を任せる。受け止める様な感覚がしてから、直ぐに体に合わせて装甲が閉じる。

「白井君のは、珍しいですね。完全装甲（フルスキン）ですか。違和感ありますか？」

「特に有りませんがどうやら、自身で最終調整しないといけないみたいです。」

「ＩＳのハイパーセンサーは、問題なく動いているな？一夏気分悪くないか？」

織斑先生は、本気で心配らしく姉弟（キョウダイ）読みになっていた。それに一夏は、それに察し

「大丈夫、千冬姉。いける」

と答えると、発艦場所に移動し箒と少し話すと空へ飛びっ発った。

一方紅兎の方は、教師陣にも見えるように空中投影でシステムチェックをしているのだが・・・

「何だよこれ！最低限のＯＳしか出来ていないじゃないか！！」

紅兎は、いったんＩＳを降りるとＯＳ製作に取り掛かった。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ・・・・・

一秒間に何回キーを打ち込んでいるか見えないくらいの速度でＯＳを作り出していく。

「ふぇ～ん目が着いていきません！」

山田先生の泣き言を無視して作っていく。

「「・・・・・私達は、一夏の試合でも見ておくか」そうしましょう。」

織斑先生と箒に見放された山田先生哀れ。

数分経ち爆煙に消えた一夏の映像が映し出されているモニターを見ている箒の悲痛の声が聞こえてきた。

「大丈夫だよ箒。一夏の闘志（炎）は、消えてない。」

「「！？」」

行き成りモニターを見ていないはずの紅兎の声が聞こえ振り向いた。

「もう終わったのか？」

「ええ御陰様で最適化（ファーストシフト）まで終わらせましたよ。」

「山田君は？」

「無理やり俺のスピードに合わせようとしてあそこで伸びています。」

織斑先生が紅兎の指差した方向を見ると長いすに紅兎の制服だろう物が掛けられ寝ていた。

「ほら箒見てごらん。」

紅兎の言われるがままモニターに目を移す箒の目に最初の時と違うＩＳ・・・一夏の姿が現れた。

確かに純白だが、最初の工業的な凹凸は、消え滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な何処か中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。

そこに一夏がブレードを眺めつぶやいた。

『俺は、世界最高の姉さんを持ったよ・・・俺も、家族を守る』

『あなた何を言って』

『取り合えずは、千冬姉の名前を守るさ！』

話に着いて行けないオルコットは、ビットを一夏に飛ばしたが、一夏の光るブレードにことごとく両断され慣性のまま一夏の横を通り過ぎて、爆ぜた。一夏は、オルコットの懐に飛び込み下段から上段への逆袈裟払いを放つが・・・その斬撃が当たる直前に決着を告

げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者―セシリア・オルコット』

戦っていた二人は、みっともないくらいポカーンと口を開けて同じような顔をしている。

そして詰みかけていたギャラリーもピットで見ていた箒も同じ顔をしていた。

織斑先生は「やれやれ」と言う顔で紅兎は、腹を抱えて声は、出さずに笑っていた。笑い涙が出るくらい。

クラス代表決定戦！（後書き）

原作通り一夏に負けてもらいました。
紅兎にオルコットのフラグ必要ないし（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9622y/

とあるIS使い

2011年12月3日22時03分発行